

食農に関わる地域クラスターの 促進方策の解明

～クラスター理論の援用による岩手県「もち姫商品化プロジェクト」と先駆的事例の比較に基づく～

笠原春乃・山田崇裕

(東京農業大学国際食料情報学部・東京農業大学)

1. 研究背景

2. 先行研究

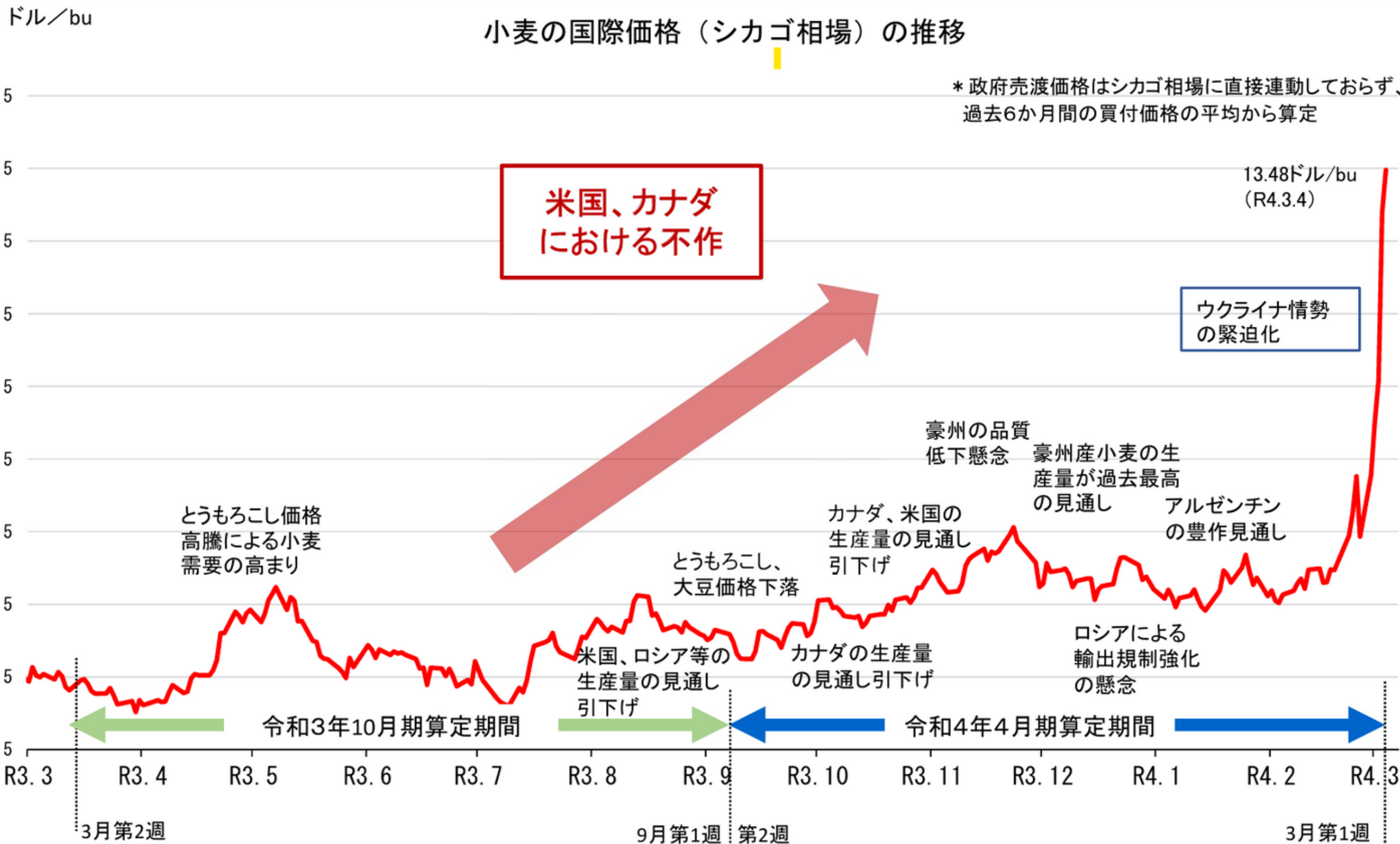
3. 研究目的 ・ 研究方法、分析視点

4. 結果報告 ・ 考察①

5. 結果報告 ・ 考察②

6. まとめ

研究背景



物価の高騰
 ➡国際情勢や各国の不作により**価格が高騰**

- ロシアの輸出規制やウクライナ情勢により国際価格が不安定に
 ⇒日本にも間接的な影響
- 米国、カナダ、豪州の日本向け産地における品質低下等により、日本が求める高品質小麦の調達価格帯が上昇

【図1】小麦の国際価格（シカゴ相場）の推移

出所：農林水産省「令和4年4月期の小麦の政府売渡価格について」より引用。

研究背景

物価の高騰

→ 生産費も高騰

- 10aあたりの生産費は年々増加している。
- 労働時間の減少により人件費は減少しているが、物財費は高騰している。

【表1】小麦生産費（個別経営体・全国）の推移

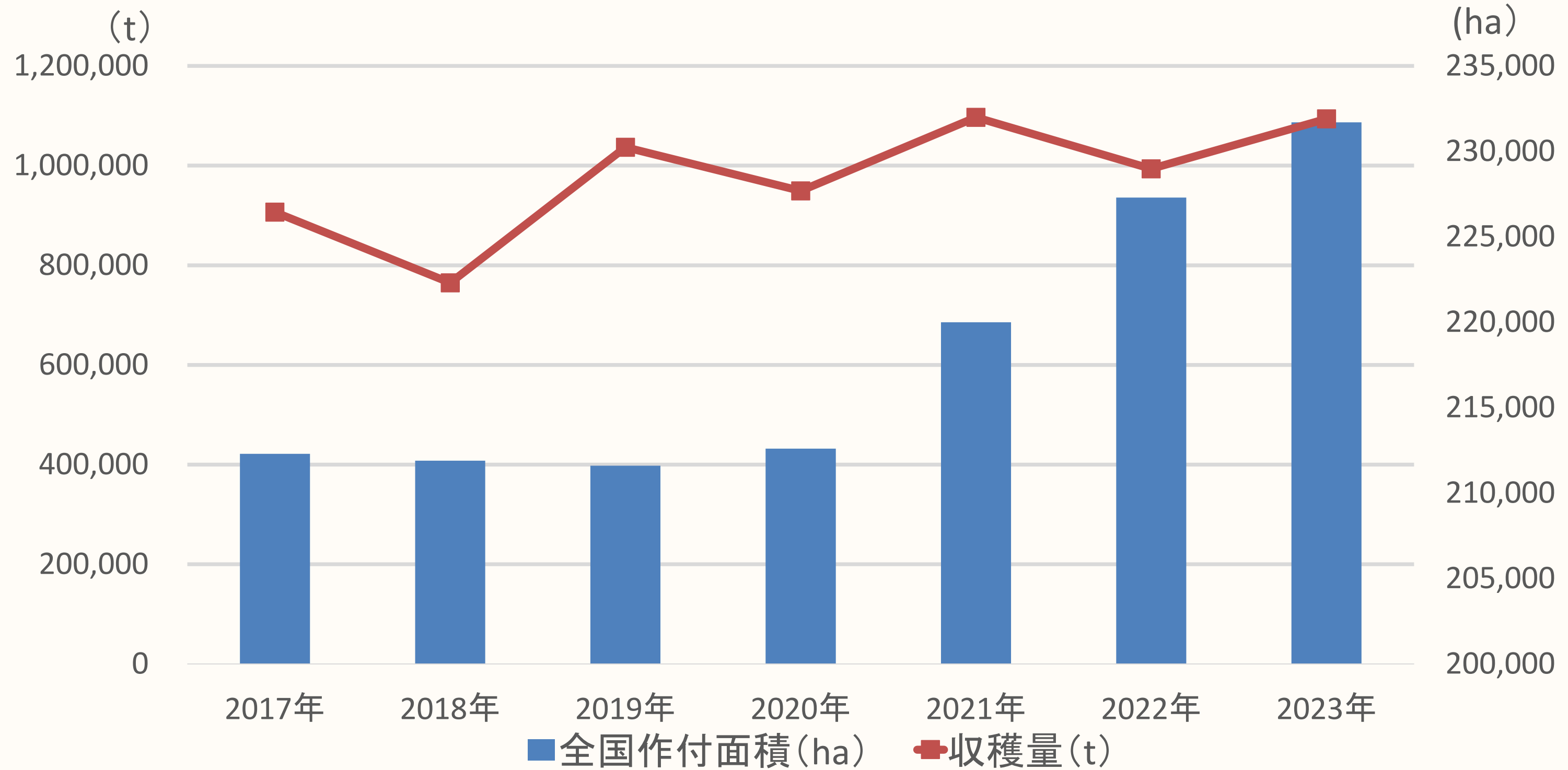
区分	10 a 当たり 全 生産 費	10 a 当たり 入 費		60kg 当たり 全 生産 費	10 a 当たり 労働時間	10 a 当たり 収 量	1 経営体 た り 作 付 面 積	参 考	
		物 財 費	労 働 費					作付面積	収 穫 量
	円	円	円	円	時間	kg	a	ha	t
平成26年産	62,437	47,804	5,816	8,447	3.68	443	709.6	212,600	852,400
27	63,764	50,063	5,784	7,023	3.66	545	737.4	213,100	1,004,000
28	62,637	48,802	5,828	9,242	3.57	408	758.5	214,400	790,800
29	63,263	48,916	6,015	7,849	3.62	483	748.9	212,300	906,700
30	61,041	47,242	5,866	9,572	3.44	383	783.1	211,900	764,900
令和元	67,426	52,065	6,332	7,465	3.55	542	798.9	211,600	1,037,000
2	67,348	52,811	6,281	8,180	3.50	495	813.3	212,600	949,300
3	67,967	53,779	5,959	7,258	3.43	562	865.4	220,000	1,097,000
4	69,551	55,151	5,935	8,804	3.41	475	879.0	227,300	993,500
5	74,243	60,334	5,826	8,634	3.25	516	926.7	231,700	1,094,000

資料：農林水産省統計部「農産物生産費（個別経営体）」、参考は同「作物統計」（以下3ページまで同じ。）

出所：農林水産省「農業経営統計調査令和5年産麦類生産費」より引用。

国産小麦の生産状況

➡作付面積と収穫量は徐々に**増加傾向**



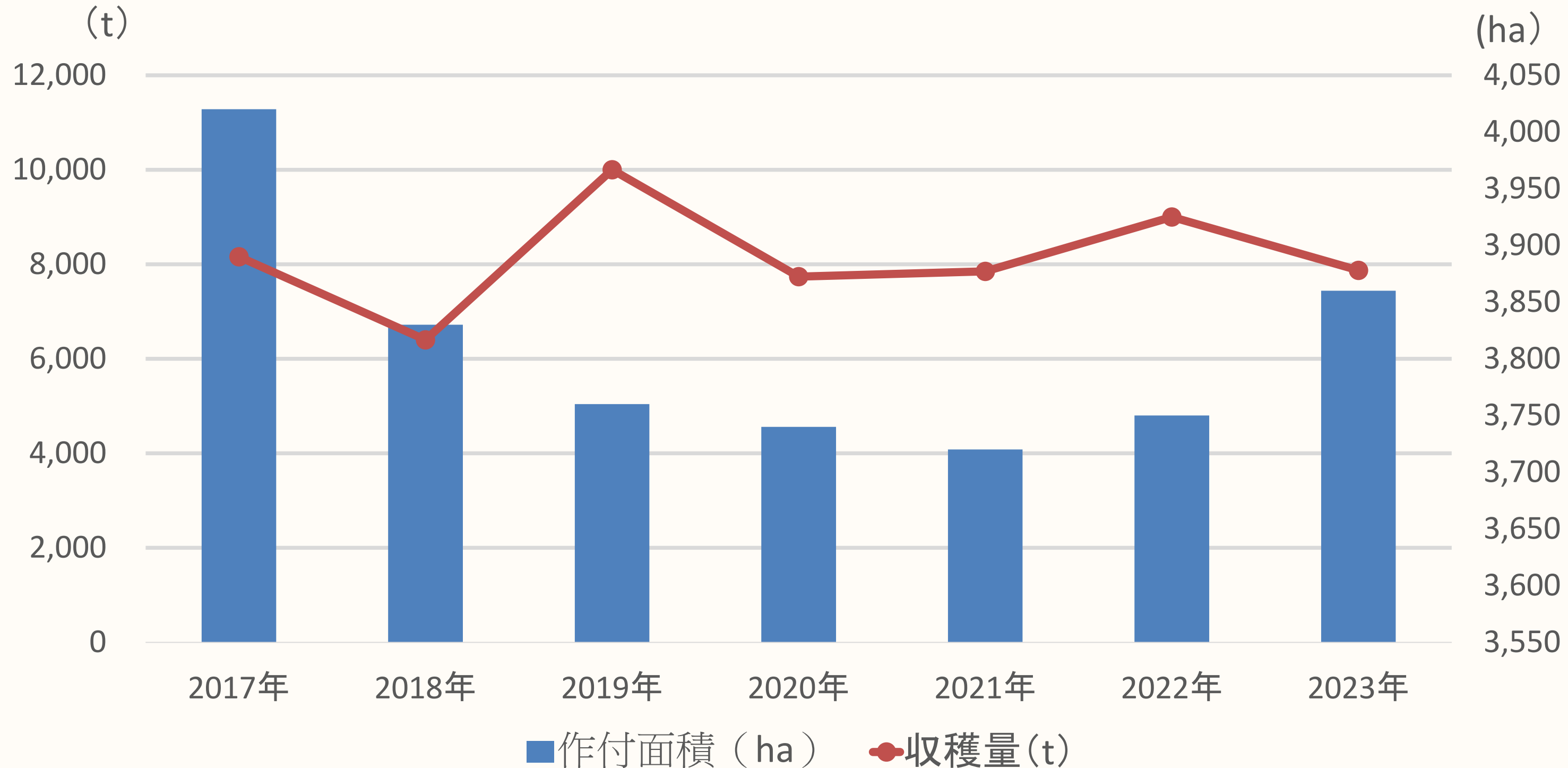
【図2】 国産小麦の作付面積・収穫量の推移

出所：農林水産省「令和5年産麦類（子実用）の作付面積及び収穫量」に基づき筆者が作成。

研究背景

岩手県における小麦の生産状況

➡作付面積は減少から**増加傾向**だが収穫量はほぼ横ばい

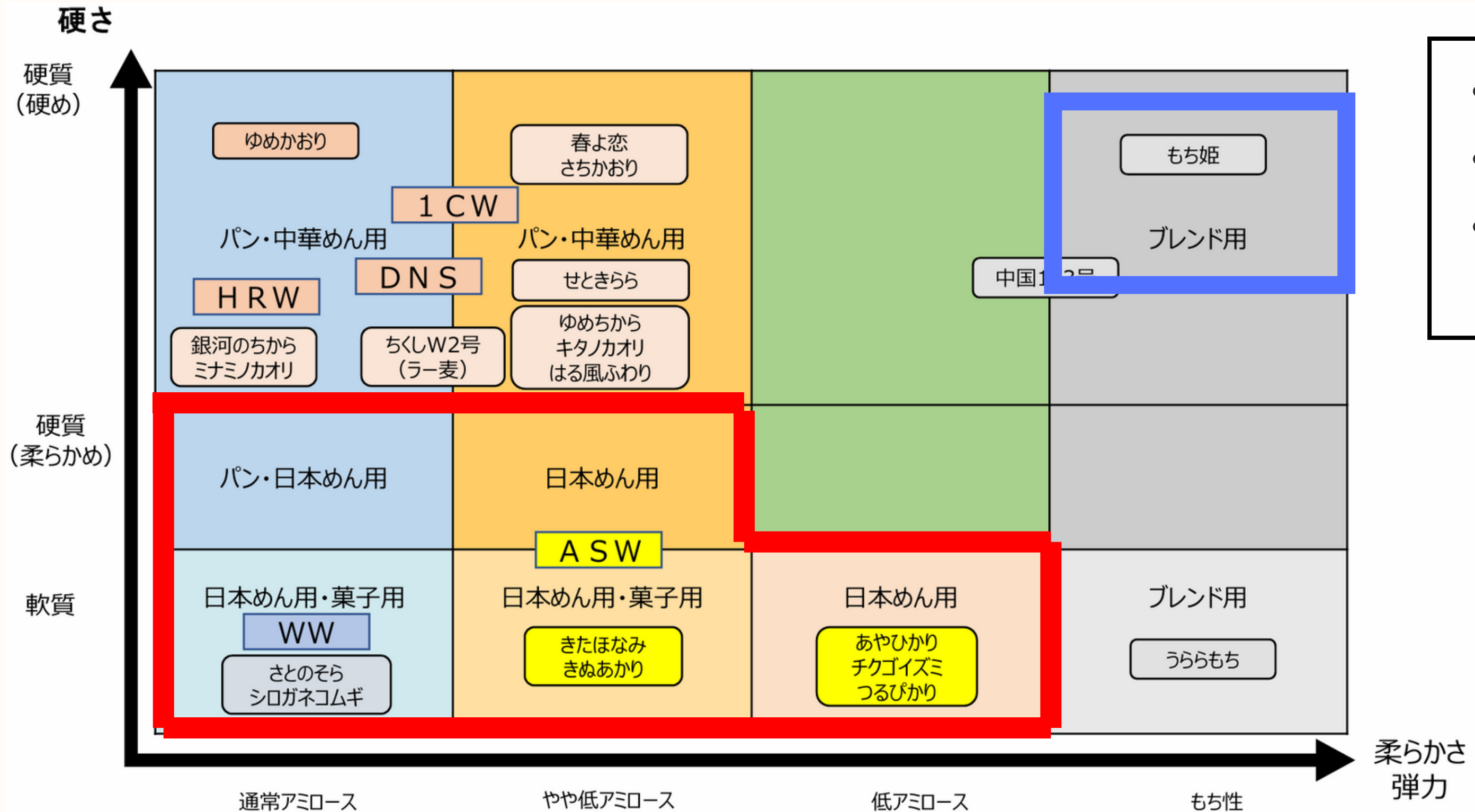


【図3】 岩手県産小麦の収穫量・作付面積の推移

出所：e-stat「作物統計調査」に基づき筆者が作成。



もち姫をブレンド➡国産小麦の使用率が低いパン用・中華麺用に代替え可能に



- 国産小麦パンの普及
- 国産小麦の需要拡大
- 小麦自給率の向上
に貢献

【図4】 デンプン関連遺伝子型による国産小麦の分類

出所：農林水産省「麦の生産をめぐる事情」より引用。

【もち姫の特徴】

- 従来的小麦にはなかった**もち性**の小麦
- 多様な加工品に応用が出来る
- 病害耐性があり、収量が多い
- 収益性が高い

【岩手県内作付面積】
 平成29年 約7ha
 ↓
 令和6年 約72ha
 大幅に増加している。

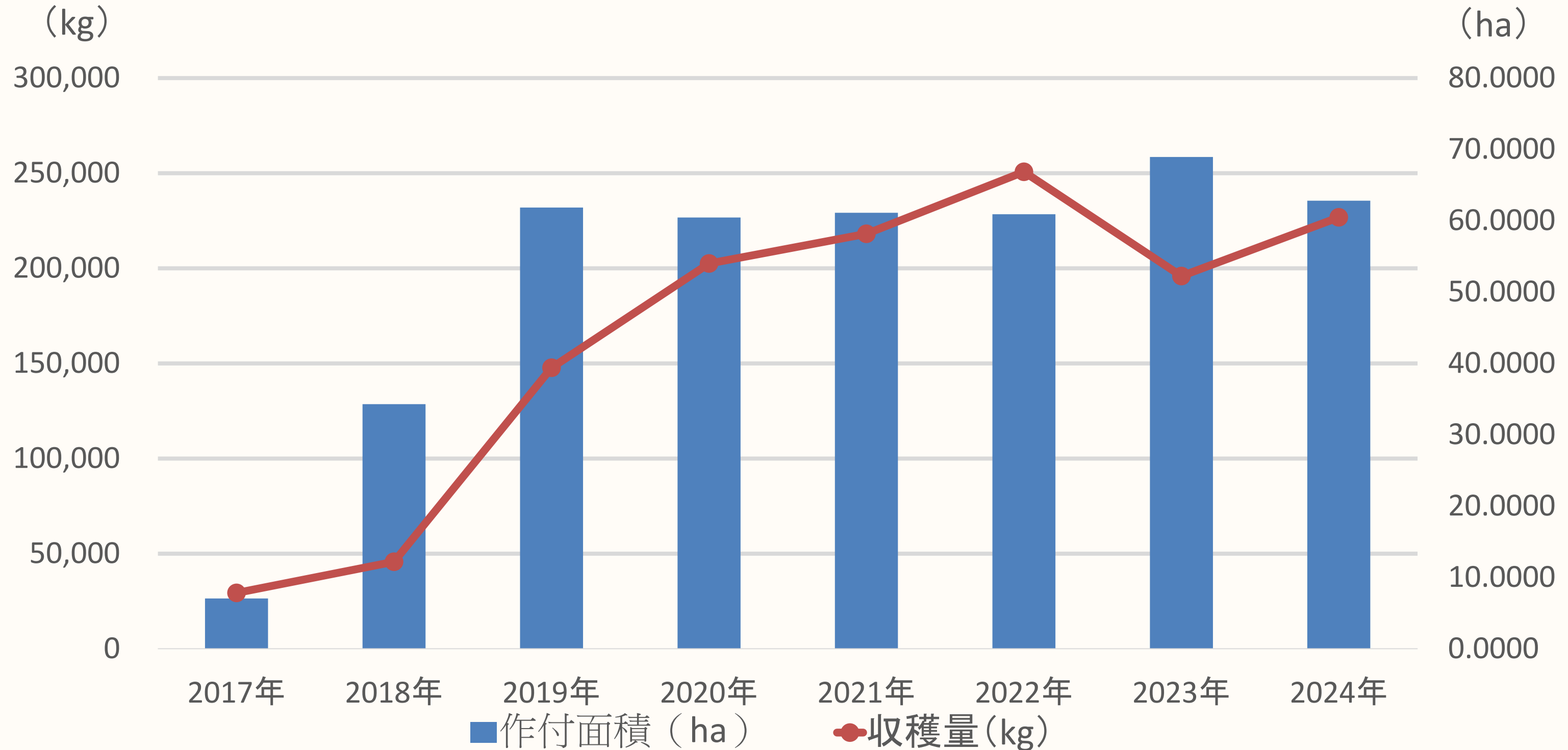
【表2】 「もち姫」生産の経営試算

	もち姫	ナンブコムギ	ゆきちから	備考
10アール収量(kg)	300	160	170	J Aいわて中央実績
単価(円/kg)	12	13	6	J Aいわて中央買取価格
小麦販売額(円)	3,600	2,080	1,020	
国交付金(円)	64,900	58,973	60,472	もち姫Dランク、その他Aランク
産地交付金(円)	16,000	11,000	13,000	平成30年産紫波町設定単価
粗収益(円)	84,500	72,053	74,492	
生産費(円)	35,954	35,954	35,954	農林水産省農業経営統計調査
所得(円)	48,546	36,099	38,538	
対ナンブコムギ(%)	134	100	106	

出所：いわてアグリベンチャーネットワーク
 ウェブページより引用。
 H29のデータを基に作成。

JIAいわて中央管内の牛産状況

➡作付面積と収穫量は増加後は横ばい。



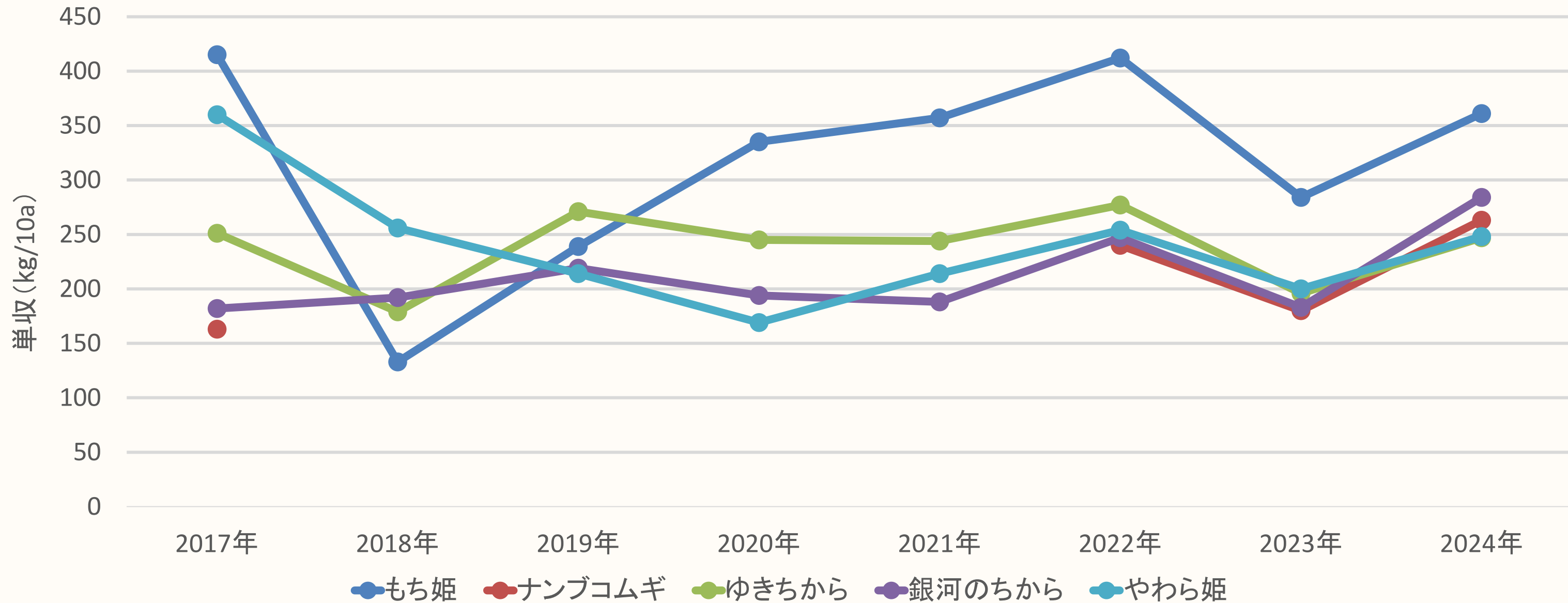
【図5】 JIAいわて中央管内の小麦の作付面積・収穫量の推移

出所：JIAいわて中央提供資料に基づき著者作成。



JAIいわて中央管内の各品種の単収推移

➡近年、もち姫は他品種に比べ**単収が高い傾向**。



【図6】 JAIいわて中央管内の各品種の単収

※ナンブコムギは2018年から2021年の間の生産はなし。

出所：JAIいわて中央提供資料に基づき著者作成。

【表3】 先行研究と各研究の概要

先行研究タイトル	発行年	出版元	筆者	要旨
国産もち小麦「もち姫」を含む国産小麦パンの製パン性および特徴的物性の解析	2011	日本調理科学会誌 Vol.44, No.3	長澤幸一ら	もち姫とブレンドしたゆめちからとカメリヤの2種類を用いてパンとベーグルを作成し、もち姫の添加量による食感や老化の違いについてまとめられている。
製粉性、粉の色相及び収量性が改善された寒冷地向けもち性小麦新品種「もち姫」の育成	2008	東北農研研報 Bull. Natl. Agric. Res. Cent. Tohoku Reg.	谷口義則ら	今までのもち性小麦と比較して耐寒雪性がやや優れ多収で、製粉性や粉の色相が大幅に改善された品種であるもち姫の育成についてまとめられている。
地域イノベーションの成功要因及び促進政策に関する調査研究—「持続性」ある日本型クラスター形成・展開論—	2004	文部科学省	文部科学省科学技術政策研究所第3調査研究グループ	地域クラスターの成功において必要な構成要素を検討したもの。現地調査による欧米における成功要素を抽出し、それをもとに日本における成功要素を検討している。
新品種活用型の農商工連携の成果と課題	2011	農村経済研究第29巻第1号	後藤一寿	農業と食品産業との連携による地域特産品の新需要創造や地域振興の促進について、各地域の事例を用いながらまとめられている。

出所：筆者作成。

【もち姫の側面】

先行研究：

- もち姫の育成やパン、ベーグルの試作
- 大豆を事例とした新品種の商品化、それによる地域振興

本研究：

もち姫商品化プロジェクトに関する**組織構造の分析**

〈具体的には、地域クラスターの評価基準を用い、**定量的・定性的**に評価。〉

【クラスターの側面】

先行研究：

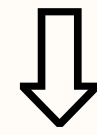
既に発展している先駆的クラスターを事例に挙げている。

本研究：

クラスターの形成から商品販売にいたるまでの過程を分析。

発足して間もない地域クラスターを事例とし、公表されている**基準を用いて**評価を行う。

食農に関わる地域クラスターの促進方策を解明する



そのための課題

1.もち姫商品化プロジェクトの組織構造の分析と課題の解明

2.先駆的事例を用いた、もち姫の商品化やプロジェクトの進展を促

す組織構造の検討

① **二次情報**をもとに、もち姫や新品種の商品化の取組みを把握する。

② 関係者の方々に対し**ヒアリング調査**を行う。

1) もち姫の品種開発経緯、品種特性について

日時：2024年9月27日 東北地域農林水産・食品ハイテク研究会H-J氏

日時：2024年9月27日 東北農業研究センターI氏

2) もち姫商品化プロジェクトの組織構造、関係組織について

日時：2024年9月27日 株式会社H製粉H-K氏、東北地域農林水産・食品ハイテク研究会H-J氏、JAいわて中央M氏

日時：2024年11月13日 K株式会社H-T氏

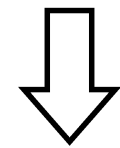
③ 調査結果を定量的に評価し、クラスター理論を**援用**して、もち姫商品化プロジェクトの組織構造や主体間関係について**分析、考察**を試みる。

クラスター理論の援用にあたって活用する分析視点

【分析視点①】 日本的成功要素

【分析視点②】 共創的連携のための八箇条

①・②の評価軸から、定量的に**分析**、**評価**し、課題を**解明**



それぞれの先駆的事例と**比較**し、今後の促進要素を**検討**

結果報告・考察①

クラスター理論の援用にあたって活用する分析視点

【分析視点①】

日本の成功要素

研究機関：

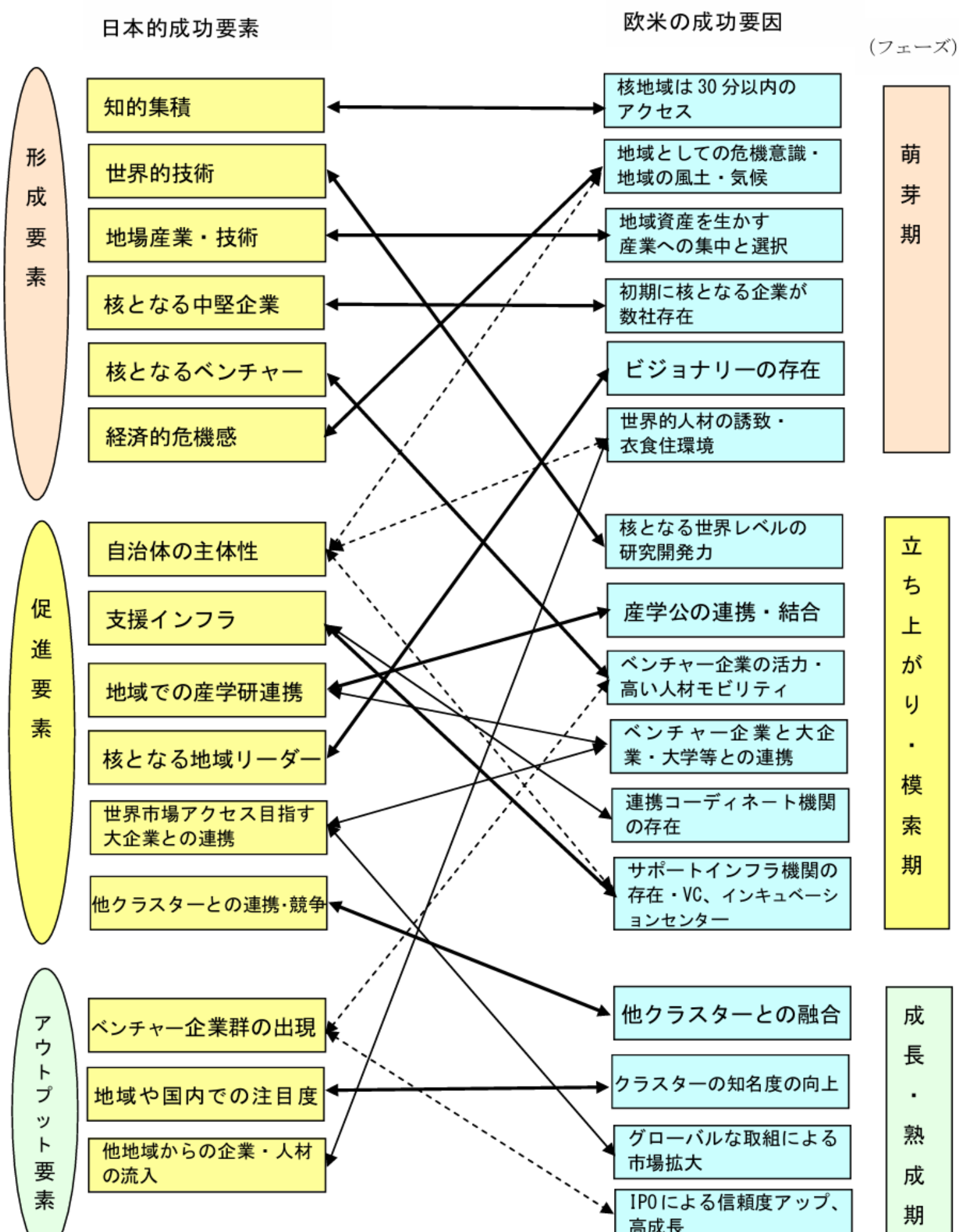
文部科学省 科学技術政策研究所

第3調査研究グループ

題名：

『地域イノベーションの成功要因及び促進政策に関する調査研究—「持続性」ある日本型クラスター形成・展開論—』

右の図は、「日本の成功要素」を「欧米の成功要因」と対応させた図。



【図7】 地域クラスターの日本の成功要素と欧米の成功要因

出所：文部科学省 科学技術政策研究所 第3調査研究グループより引用。

結果報告・考察 ①

【日本の成功要素の15項目とは】

【表4】 各要素における要素

形成要素	促進要素	アウトプット要素
<ul style="list-style-type: none"> ・ 知的集積 ・ 世界的技術 ・ 地場産業、技術 ・ 核となる中堅企業 ・ 核となるベンチャー企業 ・ 経済的危機感 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自治体の主体性 ・ 支援インフラ ・ 地域での産学研連携 ・ 核となる地域リーダー ・ 世界市場アクセスを目指した ・ 大企業との連携 ・ 他クラスターとの連携・競争 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベンチャー企業群の出現 ・ 地域や国内での注目度 ・ 他地域からの企業・人材流入

出所：筆者作成。

【地域クラスターとは】

①ある程度の知的集積の存在

②ある程度の企業群の存在

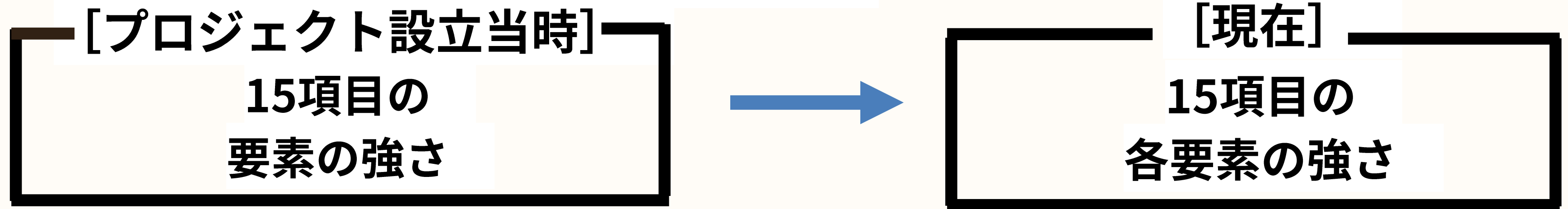
③核となるベンチャー企業の存在

④経済的危機感の存在

のクラスター形成母体うち1つ以上が備わっていることを前提とする。

【ヒアリング調査】

東北ハイテク研究会のH-J氏 JAいわて中央のM氏 (株)H製粉のH-K氏
への調査



例)

【自治体の主体性】の項目の場合

地方自治体のクラスター形成に対する取り組みについての認識を教えてください。

①非常に積極的 ②積極的 ③普通 ④消極的 ⑤非常に消極的

→**選択肢を5つ設け、リッカート尺度（5段階）で評価**

【表5】 設立時と現在の変化

日本の成功要素		設立時				現在				設立から現在の差
		H-J氏(ハイテク研)	M-H氏	H-K氏	平均値	H-J氏(ハイテク研)	M-H氏	H-K氏	平均値	
形成要素	① 知的集積	4	4	4	4.00	4	4	4	4.00	±0.00
	世界的技術（県内における強みの技術）	5	4.5	4	4.50	5	3	2	3.33	-1.17
	② 地場産業・技術	5	5	5	5.00	5	5	2	4.00	-1.00
	核となる中堅企業	0	0	5	1.67	0	0	0	0.00	-1.67
③ 核となるベンチャー	0	0	0	0.00	0	0	0	0.00	±0.00	
④ 経済的危機感（低い方が危機感がある）	3	4	2	3.00	3	4	2	3.00	±0.00	
促進要素	自治体の主体性	2	4	3	3.00	2	4	3	3.00	±0.00
	支援インフラ	3	4	1	2.67	3	4	1	2.67	±0.00
	地域での産学研連携	5	5	5	5.00	5	2	2	3.00	-2.00
	核となる地域リーダー	5	—	5	5.00	0	—	0	0.00	-5.00
	世界市場アクセスを目指した大企業との連携（県内）	3	3	3	3.00	3	3	0	2.00	-1.00
	他クラスターとの連携・競争	0	0	0	0.00	0	0	0	0.00	±0.00
アウトプット要素	ベンチャー企業群の出現	0	0	0	0.00	0	0	0	0.00	±0.00
	プロジェクトの地域や国内での注目度	1	2.5	1	1.50	1	2.5	1	1.50	±0.00
	他地域からの企業・人材流入	0	0	0	0.00	0	0	0	0.00	±0.00

※青の数字は、H-J氏ではなくハイテク研究会の評価
M-H氏の—記号は、不明なため無回答。

出所：筆者作成。

➡ **地域での産学研連携**と**核となる地域リーダー**が大きく評価が下がっている。

【表6】 もち姫商品化プロジェクトの母体形成時の要素の強さと今後の促進要素分析シート

日本的成功要素		母体形成時の強さ	今後の促進要素案(重要性)	備考
①：知的集積、②：企業集積のクラスターに分類される。				
形成要素	1知的集積	4.00		
	①知的集積	2世界的技術(県内で)	4.50	既に存在する。ただ、シーズの供給源である川上の洞察力も重要。今後、生産量が増えた際の乾燥機の台数、製粉キャパには課題有。
	②企業集積	3地場産業・技術	5.00	現在の製粉量の倍まで製粉は可能。(年間400tまで)
		4核となる中堅企業	1.67	
	③核となるベンチャー企業の存在	5核となるベンチャー	0.00	もち姫を活用した事業を主とするベンチャー企業が出現し、新たに多様な商品開発などが行われることで注目されることで起爆剤となる可能性。
	④経済的危機	6経済的危機感(低い方が危機感がある)	3.00	
促進要素	7自治体の主体性	3.00		事業化は十分に行われている。ただ、助成金などのハードルが高い。もち姫の産業化のためのPRが少ないことも課題の可能性。
	8支援インフラ	2.67		
	9地域での産学研連携	5.00		
	10核となる地域リーダー	5.00(※)	△	戦略性のあるリーダーの存在はある。だが、販売後はリーダーというより任せている側面が強く、当初の売り出し方の戦略に問題があった。
	11世界市場アクセスを目指した大企業との連携(県内)	3.00	○	川下で知名度の向上につながる可能性。いろんな場所で売れる環境整備。出口が拡大し、多様な商品の販売に繋がる。
	12他クラスターとの連携・競争	0.00		
アウトプット要素	13ベンチャー企業群の出現	0.00		
	14プロジェクトの地域や国内での注目度	1.75	◎	プロジェクトによる知名度の大幅な向上がない。プロモーションを販売会社に任せすぎているため、販路に限界がある。次に向けた持続性のある活動も重要である。
	15他地域からの企業・人材流入	0.00		

結果報告・考察①

① 「知的集積クラスター」：大企業との連携

➡ 認知度の向上による普及を期待。

(安易な販売数の増加ではなく地域クラスターのスケールに適した連携が重要)

② 「企業集積クラスター」：核となる地域リーダーの存在

➡ 商品開発後も地域とプロジェクトを繋ぐ存在。

(商品の開発後についても目線合わせが必要)

ヒアリング調査により、認知度の向上を主とした限定的な販路や他商品の開発など川下に課題が残っていることが分かった。

結果報告・考察①

調査結果から川下に課題意識を持っている主体が多い。

➡総合的に判断し、もち姫商品化プロジェクトは①の知的集積のクラスターと捉えられる。

今後のプロジェクトの促進案：

◎【プロジェクトの地域や国内での注目度】

○【大企業との連携】

△【核となる地域リーダー】

クラスター理論の援用にあたって活用する分析視点

【分析視点②】

共創的連携のための8箇条

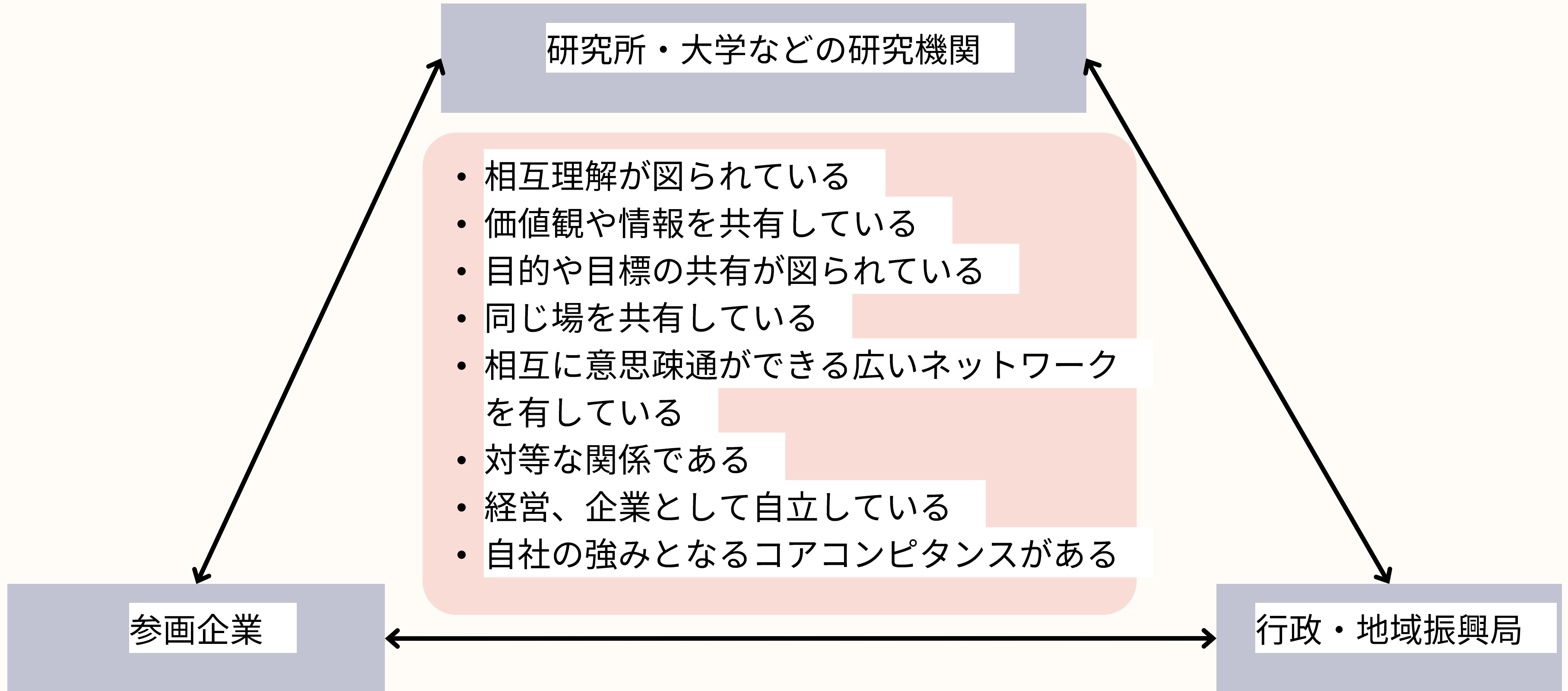
著者：後藤一寿

題名：『新品種活用型の農商工連携の成果と課題 ～共創的連携のための8箇条～』

【比較する優良クラスター】

- **共創的連携を行ったクラスター**（黒大豆クロダマルコンソーシアム）

※八箇条の条件を満たしているかを調査する。その後、黒大豆の事例を用い、促進案を提案。



【図8】 共創的連携のための八箇条

【表7】 共創的連携の条件と理論背景

共創的連携のための8箇条	主とした理論的背景
参画する組織は経営、企業として自立	コア・コンピタンス
交渉における、組織間の関係(パワー関係)は対等	ソーシャルキャピタル、プラットフォーム
参画する組織の有するコアコンピタンス	コア・コンピタンス
異業種の組織間で相互理解	場、プラットフォーム、ソーシャルキャピタル
価値観や情報の共有	場、プラットフォーム、Voice型コンソーシアム
目的や目標の共有	共創、オープンイノベーション
活動を行う際、同じ〈場〉を共有	場、プラットフォーム
組織間または個人間での関わり	ソーシャルキャピタル

出所：後藤一寿氏「コンソーシアムに着目した食農連携の分析視角—九州黒大豆プラットフォームの活動を通して—」に基づき筆者が作成。

【ヒアリング調査】

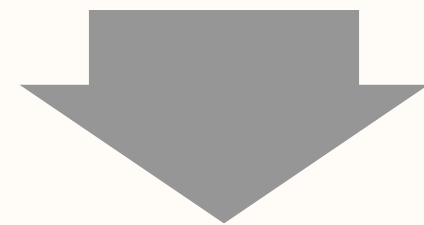
東北ハイテク研究会のH-J氏 JAいわて中央のM氏 (株)H製粉のH-K氏
への調査

例)

【参画する組織は経営、企業として自立】の項目の場合
プロジェクト内の各組織は自立していますか。

はい いいえ

→ **はいの場合は、達成度を1～5で評価**

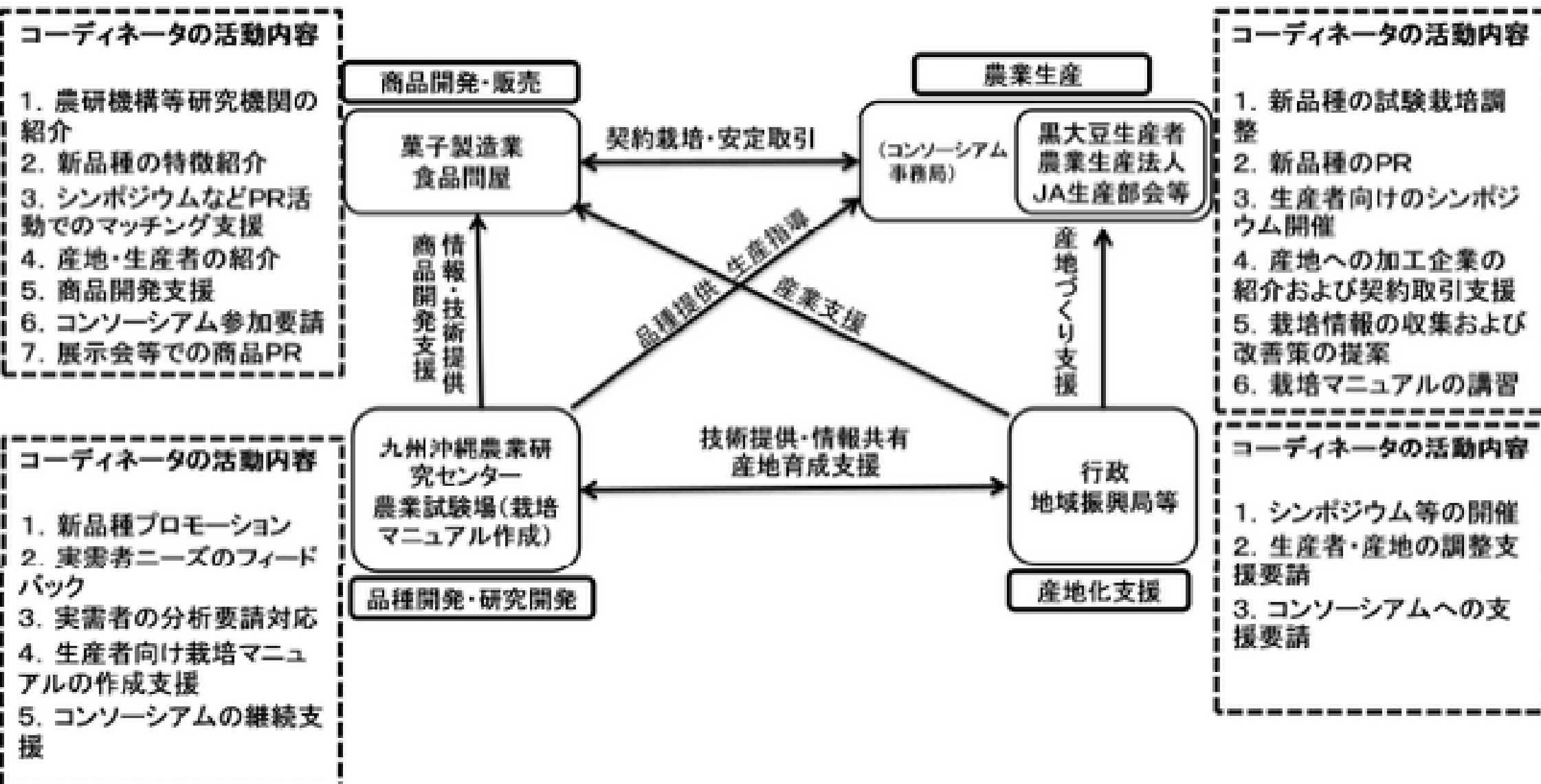


弱みや課題を明らかにし、その後、優良事例と比較する。

【表8】 共創的連携のための八箇条の調査結果

共創的連携のための8箇条	設立時 (n=3)	現在 (n=3)	差	備考
参画する組織は経営、企業として自立	5.00	5.00	±0.00	各組織は安定した経営基盤を有している。
交渉における、組織間の関係（パワー関係）は対等	3.33	3.33	±0.00	設立時から立場によって関係性の捉え方が違う。
参画する組織の有するコアコンピタンス	5.00	5.00	±0.00	各組織が強みをもちプロジェクトでも活かしていた。
異業種の組織間で相互理解	3.50	1.67	-1.83	組織によっては積極性に相違があった。活動量が減ったため。
価値観や情報の共有	4.83	2.67	-2.17	プロジェクト活動が鈍化し組織間の連携が減ったため。
目的や目標の共有	5.00	1.67	-3.33	共有は図れていたが多少の相違があった。活動量が減ったため。
活動を行う際、同じ〈場〉を共有	4.33	1.67	-2.67	集まりの頻度に差があった。活動量が減ったため。
組織間または個人間での関わり	2.33	1.67	-0.67	プロジェクト活動が鈍化し組織間の連携が減ったため。

結果報告・考察 ②



【図9】 コンソーシアムモデル例と各主体に対するコーディネーターの活動内容

- 【クロダマルのコンソーシアムモデル】
- ① 農業研究センターが企業と生産者をマッチングし直接取引を行う。
 - ② 双方の不安点を解消しつつ科学的なデータなど必要な情報提供や支援を行う。



- ★大豆を安定的に供給できる。
- ★生産者は最終製品が目に見えるようになり、モチベーションが向上。

〈ポイント〉

各企業が大豆の商品開発を行うことで多くの商品が開発され、長期的に多様な場で販売される。

【もち姫商品化プロジェクト】

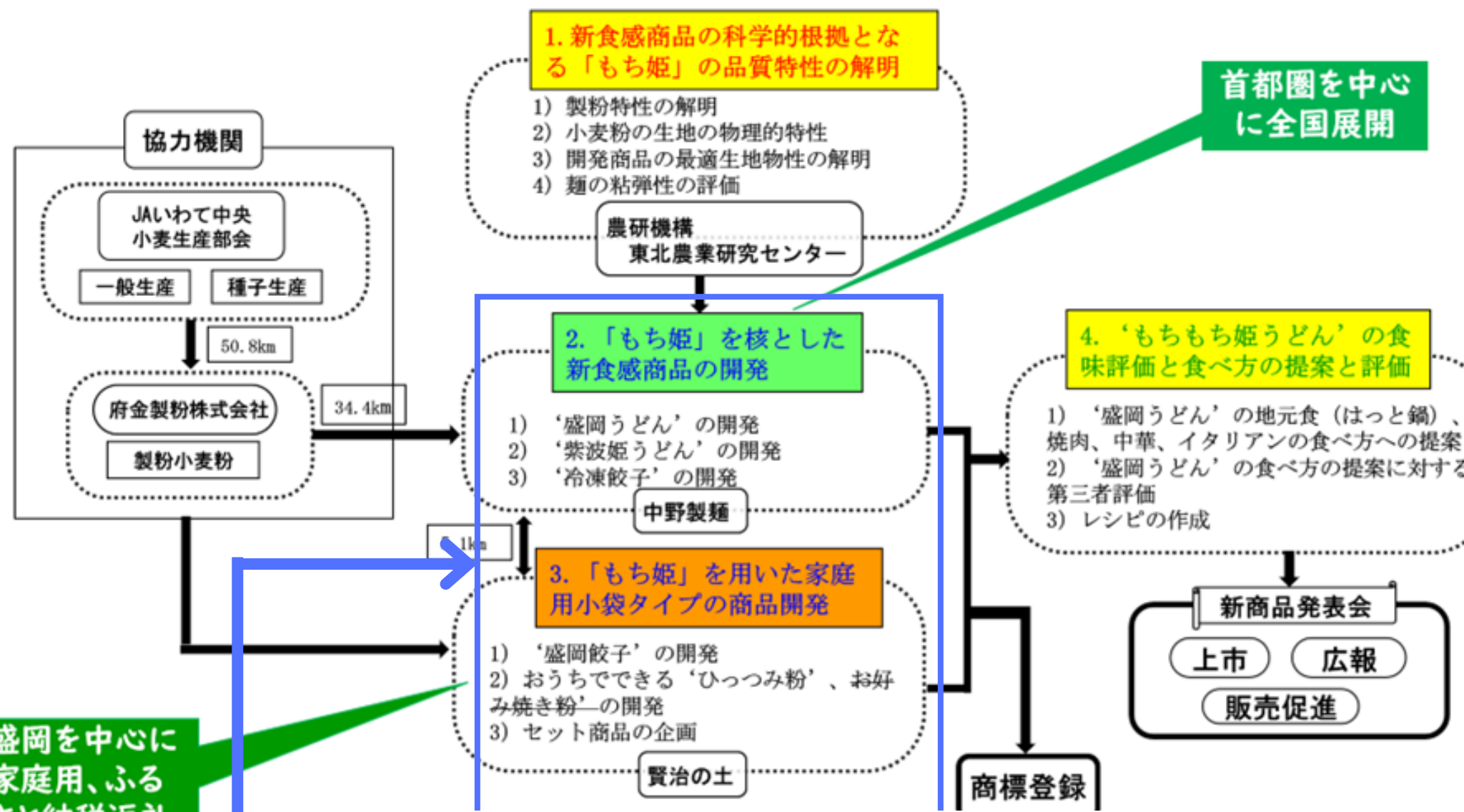
生産者、JA、製粉会社、製麺会社、販売会社の順に小麦が流れ**すべての組織が協力して1つの商品**を創り出す。



- ★各組織に役割があり相互で競合しない。
- ★生産者は最終製品が目に見える。
- ★ハイテク研が中心となり科学的なデータを用いて**唯一無二の商品**が出来上がる。
- ★関わる主体が広がり、**多くの主体からデータ**を入手し活用できる。

〈課題〉

異業種間の相互理解、**パワーバランスに差を感じる組織**がある。
場を共有する組織に**ばらつき**が生じている。
組織間、個人間での**関わりが**少ない。



【図10】 参画機関の開発項目及び役割分担

(図中の□内のkmは輸送距離)
出所：ハイテク研提供資料より引用。

製麺会社と販売会社の連携は頻繁であった。

結果報告・考察②

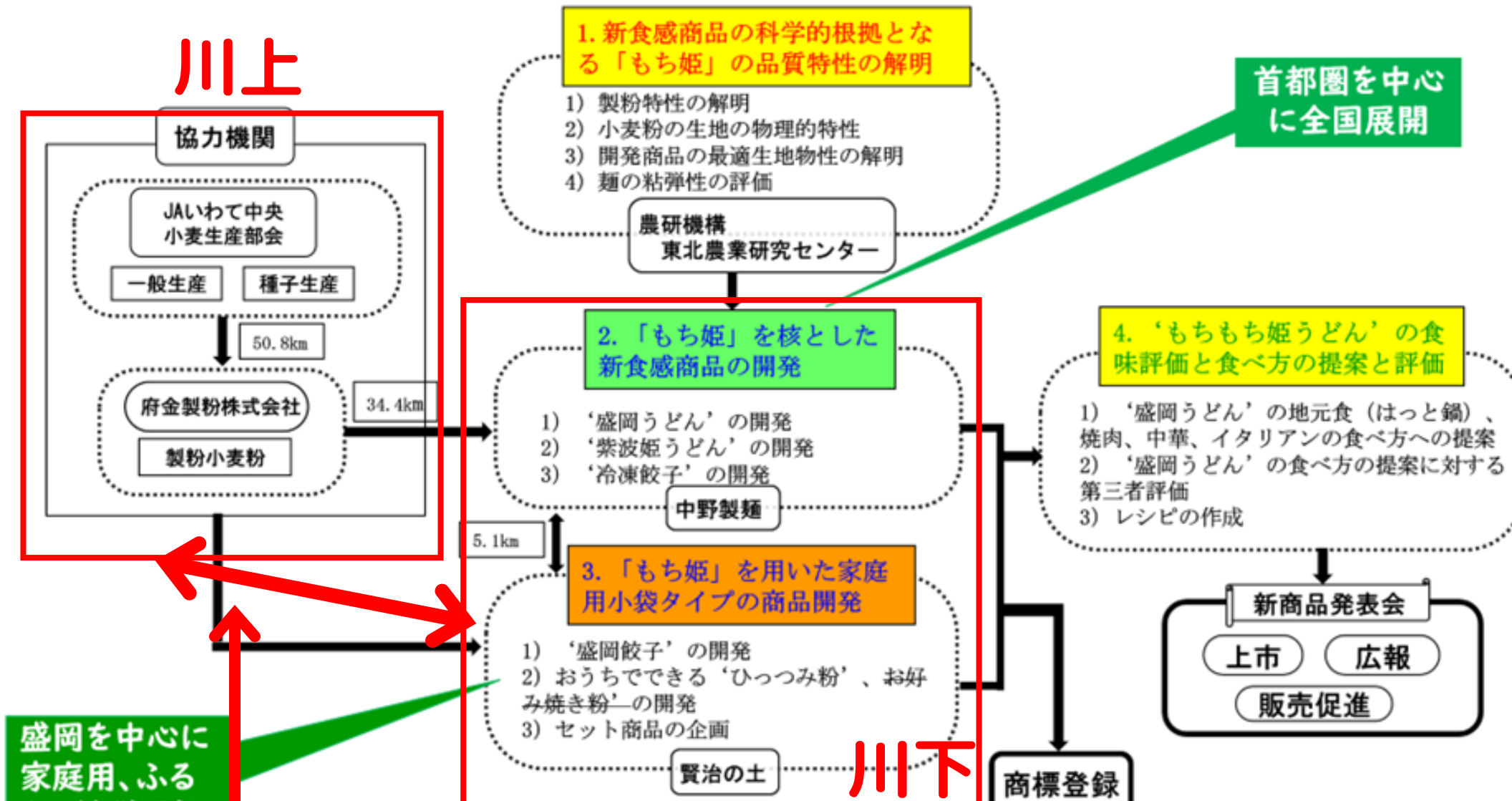
【もち姫商品化プロジェクト】

- 助成金をうけている活動のため、成果報告に期限があった。
→時間の制約による目線合わせや出来ることの制限。
商品開発後は、成果報告等が終わったため連携が鈍化。
プロジェクト自体を世の中に発信していく意図はなかった。
- 各組織の代表者は社長等が多く、プロジェクト以外でも非常に多忙である。

〈課題〉

- 異業種間の相互理解、**パワーバランスに差を感じる組織**がある。
➡川下の企業にパワーバランスが傾きがちであることは従来の慣習であり、当事者の課題意識はない。
 - 場を共有する組織に**ばらつき**があった。
- ➡決定権がある人が多くスピード感がある反面、スケジュール調整が困難。
 - 組織間、個人間での**関わりが少ない**。

結果報告・考察②



【図11】 参画機関の開発項目及び役割分担

(図中の□内のkmは輸送距離)

出所：もち姫商品化最終報告より引用。

〈課題〉

- ・ 異業種間の相互理解、パワーバランスに差を感じる組織がある。
- ・ 場を共有する組織にばらつきがあった。
- ・ 組織間、個人間での関りが少ない。
(期限付きの活動にせざるを得ず、関係構築にまで手が回らなかった可能性大。)

〈促進方策〉

- ・ 川上の組織もオンラインを含めた場を共有する時間の増加による、**連携の質向上**。
(マーケティングの部分etc)
- ・ 全体が集まる頻度の増加による**効率化**。
(ソーシャルキャピタル)

ここでの会議や集まりを増やし場の共有を増やす。

ハイテク研は各組織への支援と川下と川上を繋ぐ役割。

まとめ

【分析視点①】 日本的成功要素

もち姫商品化プロジェクトは①の知的集積のクラスターと捉えられる。
今後のプロジェクトの促進案：

- ◎ 【プロジェクトの地域や国内での注目度】
- 【大企業との連携】
- △ 【核となる地域リーダー】

【分析視点②】 共創的連携のための八箇条

- 川上の組織もオンラインを含めた場を共有する時間の増加による、**連携の質向上**。
- 全体が集まる頻度の増加による**効率化**。

参考文献

- 1) 後藤一寿 (2011) 「新品種活用型の農商工連携の成果と課題」, 『農村経済研究第29巻』.第1号
- 2) 後藤一寿 (2014) 「コンソーシアムに着目した食農連携の分析視角—九州黒大豆プラットフォームの活動を通して—」
- 3) 谷口義則ら (2008) 「製粉性、粉の色相及び収量性が改善された寒冷地向けもち性小麦新品種「もち姫」の育成」. 『東北農研研報 Bull.Natl.Agric.Res.Cent.Tohoku Reg』
- 4) 長澤幸一ら (2011) 「国産もち小麦「もち姫」を含む国産小麦パンの製パン性及び特徴的物性の解析」. 『日本調理科学会誌』.Vol44.No.3
- 5) 梶山武志 (2024) 「新規生地特性を有する「モチ小麦：もち姫」(「もち姫」)を用いた新食感‘もちもち姫うどん’及び‘もちもち姫餃子’などの開発」
- 6) 文部科学省科学技術政策研究所第3調査研究グループ (2004) 「地域イノベーションの成功要因及び促進政策に関する調査研究—「持続性」ある日本型クラスター形成・展開論—」

参考ウェブサイト

1) 作物統計調査

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00500215&tstat=000001013427&cycle=7&year=20230&month=0&tclass1=000001033085&tclass2=000001214642&tclass3val=0> 最終アクセス2024年11月25日

2) 農業経営統計調査令和5年産麦類生産費

https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/noukei/seisanhi_nousan/pdf/seisanhi_mugirui_23.pdf 最終アクセス2024年11月25日

3) 麦の生産をめぐる事情

https://www.maff.go.jp/j/syouan/keikaku/soukatu/attach/pdf/mugi_kanren-180.pdf 最終アクセス2024年11月25日

4) 《盛岡》産官等連携による「もち性小麦」を核とした地域振興～もち姫物語～

<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/local/morioka/sanchi/2001593.html#:~:text=%E3%80%8C%E3%82%82%E3%81%A1%E5%A7%AB%E3%80%8D%E3%81%AE%E7%94%9F%E7%94%A3,%E3%81%A7%E6%8B%A1%E5%A4%A7%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82> 最終アクセス2024年11月25日

5) 令和4年4月期の小麦の政府売渡価格について

<https://www.maff.go.jp/j/press/nousan/boeki/attach/pdf/220309-1.pdf> 最終アクセス2024年11月25日

6) 令和5年産麦類（子実用）の作付面積及び収穫量

https://www.maff.go.jp/j/tokei/kekka_gaiyou/sakumotu/sakkyou_kome/mugi/r5/ 最終アクセス2024年11月25日

ご清聴ありがとうございました

参考資料 ①

【表4】 地域クラスター形成母体ごとの形成時の強さと今後の促進要素平均点

形成母体ごとの成功要素の平均点 (◎:3点, ○:2点, △:1点)

形成母体		知的集積 7地域		企業集積 6地域	
		母体形成時の強さ	今後の促進要素案	母体形成時の強さ	今後の促進要素案
形成要素	知的集積	1.7	0.0	0.0	0.3
	世界的技術	1.3	0.0	0.7	1.2
	地場産業・技術	0.3	0.0	2.5	0.0
	核となる中堅企業	0.6	0.0	1.0	0.2
	核となるベンチャー	0.3	2.1	0.0	0.8
	経済的危機感	0.0	0.0	0.0	0.0
促進要素	自治体の主体性	0.4	1.0	0.8	0.0
	支援インフラ	0.0	0.0	0.0	0.0
	地域での産学研連携	1.0	0.6	1.0	0.5
	核となる地域リーダー	0.0	0.3	0.0	1.0
	大企業との連携	0.0	1.0	0.0	0.8
	他クラスターとの連携・競争	0.0	0.7	0.0	0.3
アウト プット 要素	ベンチャー企業群の出現	0.0	0.0	0.0	0.3
	地域や国内での注目度	0.4	0.0	0.0	0.2
	他地域からの企業・人材流入	0.0	0.3	0.0	0.3

先行研究の考察によると、
 〈母体形成時に青が強いと
 促進要素は、赤になる傾向が強い〉
 と考えられている。